

インドの学校事情

東方研究会専任研究員
立正大学講師 高橋堯英

“Hey Fresh! Come here!” “Yes,sir!”

“Fresh,what's your name? Which school are you from?”……

こんなやり取りがキャンパスのいたる所で交わされ、上級生による精神的肉体的「しごき」で終始した一ヶ月のラギングの期間が過ぎると、やっと、新入生も“Stephanian”として認められることになりました。

当時の我々の一番の楽しみは、何故か、キャンパスの一隅に設けられた「カフェー」と呼ばれる喫茶室の利用の解禁でした。文庫本くらい

の大きさの食パンのスライス二枚を皿に乗せ、その上にトマトのいっぱい入った半熟のスクランブルド・エッグをかけたものがこのカフェーの名物で、コシヨウをしっかりと利かせて食べるのです。時間帯によっては、丁度日本のコロッケのようなマトン・カトウレットの揚げたても食べられました。学生は、スライスをバタード・トーストにしたり、マトン・カトウレットを二つオーダーしたり、その日の懐具合に従って注文して空腹を満たすのです。ラギング期間中、上級生にカフェーに連れて行かれ、悪くす

ると講義にも行かせてもらえず二時間近くもの
間質問責めにされ、挙げ句の果てに上級生が旨
そうにスナックにむしやぶりつく様子を見せつ
けられる、ということを生入生の誰しもが経験
していただだけに、カフェーの利用解禁がうれし
かったのだ、と思います。

さて、冒頭の会話でも明らかなように、上級
制は必ず出身校を聞きます。出身校で、その新
入生の大体の背景が理解できるからです。

インドでは、今でも小学校の一年生から高等
学校の最終年の十二年生迄（一九八一年に、十
一年教育制から十二年教育制に移行されまし
た）が同じ学校で教えられているケースが多く、
公立や私立など様々な学校があります。興味深
いものには、後にボンベイの税務署の税務官に
なった友人R・K君の出身校のように、サイニ
ク (Sainik) ・スクールと呼ばれる陸軍幼年学校
などがあります。

しかし、特筆すべきものは、パブリック・ス
クールと称する私立学校の存在でしょう。

私の周りにも、ラジブ・ガンディー元首相
が幼年時代を過ごしたデラドウーンのドウー
ン・スクールや、セポイの反乱の時レジデンシ
ーに立てこもったイギリス人住民を守るため学
生が最後まで反乱軍に抵抗し散っていったとい
う伝統を持つラクノーのラ・マーティニアアー・
カレッジとか、勇敢なラージプート族の子弟育
成のためにアジメールの藩王が設立したという
メイオ・カレッジなどの出身者が居ました。彼
らの多くは、小学校の二、三年生頃パブリッ
ク・スクールに転校させられて以来、親元を離
れた寮生活が続けているという者たちでした。

パブリック・スクールの多くは、シムラヤム
スリー、そしてダージリンなどのヒマラヤ山麓
の避暑地にあり、主にキリスト教の伝道団体に
よって経営され、英語による一貫教育が行われ

ています。大英帝国による統治の置き土産なのか、インドでエリートとして成功するためには、しっかりした英語力がものをいいます。特にビジネスマンが多いのですが、親たちは子供たちの将来のための投資として、そして、パブリック・スクールに子供を通わせているという一種のステータス・シンボルとして、全寮制のパブリック・スクールに子供たちを転校させるのです。私の周りに居た十人位のパブリック・スクール出身者の内、ヒンディー語で家族に手紙を書いていた者は、ビハール州とラジャスタン州出身の三名程度という有様でした。他の者たちは、ヒンディー語は話せるだけ、という連中。しかし、おどけて、アメリカ人のアクセントやオックスフォード大出身者のアクセント等を使い分け、講師の先生方の物まねを披露してしまような、そんな連中だったので。

ラギングの極度の緊張から解放され、九月も

半ばを過ぎる頃になりますと、チェスやブリッジなどのサークル活動や、スカッシュやテニスなどのスポーツを通じて、学生相互のコミュニケーションが更に深められていきました。また、極親しい者のグループなども自然と生じてきました。一たびこのような「仲間」意識が芽生えると、少なくとも彼らとは心に着けていた鎧を外してつき合うことができ、腹の底から大声で笑い合えるような機会も増えてきたのです。英語とも米語とも違うインド英語のアクセントのため、留学生の誰しもが経験する英語ノイローゼの時期にあったその頃の私も、ラギング期間中に知り合った仲間の「明るさと笑顔」に引張られ、余り落ち込むこともなく時を過ごすことができました。差し詰め、友の明るい笑顔が作りだした環境と雰囲気、「良薬」そのものだった、ということなのでしょうか。

(つづく)